

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六）（公衆）〇四七二（二二）七二〇七

ざんげせよ

天皇訪沖反対！！ 沖縄闘争報告

青年部
青シ

中曾根の狙いを打ち砕く！

本土の労働者こそ沖縄闘争を
たたかわなくてはならない

われわれ沖縄派遣団は、十月二二―二五日までの四日間、沖縄のたたかう人々を結集し結成された主権者県民会議と共に天皇の名代・皇太子訪沖阻止の闘いを貫徹してきました。

結論的に言って、沖縄闘争は、敵の狙いである反天皇・反戦のたたかいの掃として持ち出した国体への天皇訪沖（名代として皇太子訪沖）攻撃に対し、これを打ち砕き大勝利したということです。

日帝・中曾根の国体に向けた「日の丸・君が代」天皇制賛美のゴリ押しは、県民の心を逆なでにし、怒りをひきおこし、真に闘う者が結集し、闘うポーズをとってきた革マルを糾弾し、その枠を越えて闘いにたちあがるという沖縄闘争の新たな地平をつくりだすものとなったのです。

とりわけ、二四―二五日と行われた主権者県民会議主催の集會に、本土から三里塚反対同盟を先頭に、われわれ勤労千葉、動労総連合、国労共闘など三里塚勢力が結集し、交流をもちったことは決定的な勝利をかちとったといえます。

小・中学、高校生の闘い。そして住民団体、労組員など県民の国体会場での「君が代」斉唱拒否の闘い、抗議の座り込み、ワッペン闘争。二六日には、読谷村・ソフトボール競技会場での日の丸をひきずりおろすという闘いなど、国体の歴史はじまって以来であり、国体の狙いである「天皇制の下への国民統合」を根底から打ち砕き、それはまた、日本全体に、沖縄の戦後は終っていないことを鮮明にし、敵に大打撃を強制しました。



那覇市民が注目する中、「皇太子訪沖反対」の実力デモを行う。
(10/24、14時物通リから国際通りへ)

二つには、沖縄県民の決起に、われわれ本土労働者はどう応えていくのかという問題です。その前提にわれわれが確認しなければならぬことは、①天皇と天皇制護持の為に、県民二十万人が虐殺された沖縄戦を強いられ、②戦後米帝に売り渡されたということ。③七二年ベトナムの本土復帰以降十五年、日米帝の侵略の拠点、基地の島として住民の生活を無視し犠牲を強要しつづけているということ。④しかもこうした沖縄の現実に背を向け抹殺し何ら闘いを組織し得なかった既成野党、総評、労働運動指導部、そして本土人民の責任は大きいといえます。

労働運動の原点を貫き、
戦争政治を粉碎しよう

沖縄に行つて、本土では考えられない反天皇・反戦の強烈で根強い意識を、四日間という短い滞在期間であっても街かどのおばさん、タクシー運転士など行く先々でその一片を見るのができました。とくに、集団「自決」を引きおこした皇民化教育の恐ろしさは、子供、孫へと代々語り継がれています。平和の為の読谷村実行委員会の人々が言った言葉が今でも聞こえてきます。「天皇に殺されたんだ」。皇民化教育がもたらした自分の親や子を殺し、自らも死んでいった集団「自決」はその人にとって決して過去の出来事ではなく、今日の問題としてとらえ、危機感をもって闘っている姿に、心をうたれました。と同時に、中曾根の「沖縄の戦後を終わらせる」新しい戦前への攻撃。これと一体となって、「日の丸労働運動」を掲げる革マル松崎に、心の底から怒りがこみ上げてきます。

今こそ、三里塚・国鉄決戦に勝利し、中曾根、革マル松崎を打倒し、戦争国家化を阻止しよう。これが唯一沖縄県民の闘いに応える道であり、労働運動の原点を守りぬく闘いです。

最後になりましたが、組合員みなさんの心あたたまる多大なカンパに心からお礼を申し上げ、闘争報告とします。